

令和6年度病害虫発生予察情報 発生予報第1号

令和6年4月24日
発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲 (育苗期)	苗立枯病 (ピシウム属菌、フザリウム属菌等による立枯病)	全 域	—	平年並	発生量は近年並に少なく推移している(±)。	急激な温度変化や、過湿・乾燥の繰り返しは発生を助長するため、適切な温度管理を行う。 育苗期間中は気温の変動が大きいと予想されるため、育苗ハウスの温度に注意し開閉等を行う。
	もみ枯細菌病	全 域	—	やや多い	種子更新率は平年並である(±)。 天候予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されている(+)	育苗期間中は28℃以下の温度管理を徹底する。 育苗器内の温度は、付属センサーだけではなく温度計を併用し、育苗ムラに注意する。
	苗立枯細菌病	全 域	—	やや多い		育苗期間中は気温の変動が大きいと予想されるため、育苗ハウスの温度に注意し開閉等を行う。
	イネミズゾウムシ	全 域	早い	平年並	有効積算温度によるシミュレーションでは、 水田侵入盛期は早い と予想される。	水田侵入盛期が移植時期と重なる場合は、被害が大きくなりやすいので注意する。 高密度は種の場合は、箱処理剤の施用量に注意する。
	イネドロオウムシ	全 域	早い	平年並	有効積算温度によるシミュレーションでは、 水田侵入盛期は早い と予想される。	幼虫期に低温が続く場合は、被害が大きくなりやすいので注意する。 高密度は種の場合は、箱処理剤の施用量に注意する。 チアメトキサム剤に対する感受性低下が確認されているため、効力低下が認められる場合には、薬剤を変更する。
麦類	赤かび病	浜通り	早い	平年並	4月の平均気温は高く推移しており、天候予報によると向こう1か月の気温は平年より高いと予想されるため、 出穂期は浜通りで平年と比べて早く、中通り、会津で並～やや早い と予想される。 天候予報によると、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている(±)。	防除時期や薬剤等については、令和6年4月15日付け防除情報を参照する。
		中通り 会 津	並～ やや早い			

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	うどんこ病	全域	—	平年並	4月中旬の花そう葉での発生は、平年同様に確認されなかった(±)。	発病葉は見つけしだい、せん除して園外に持ち出すなど適切に処分する。
	リンゴハダニ	全域	—	やや少ない	令和5年12月実施の越冬量調査において、越冬卵が確認されたほ場の割合は平年よりやや少なかった(—)。	ハダニ類の発生状況を観察し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達したら殺ダニ剤を散布する。
	ハマキムシ類(越冬世代)	全域	—	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花そう被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	前年に発生が多かった園や、現在、花や新梢に食害が見られる園では、落花直後の防除を徹底する。 複合交信かく乱剤を使用する園では越冬世代成虫発生初期までに設置する。
モモ	せん孔細菌病	中通り	—	平年並	4月中旬の県北地域の巡回調査(品種「あかつき」)において春型枝病斑の発生は確認されなかった(—)が、参考調査の「ゆうぞら」ほ場や他地域のほ場で春型枝病斑の発生が確認されている(+)	春型枝病斑は見つけしだい、せん除して適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する(令和6年4月24日付令和6年度病害虫防除情報「モモせん孔細菌病」参照)。
	モモハモグリガ(第1世代幼虫)	中通り	—	平年並	令和5年12月実施の越冬量調査において、越冬成虫の発生地点割合は、平年並であった(±)。	落花10日後頃を目安に防除を実施し、発生密度を抑えたいうえで、複合交信かく乱剤を設置する。
	ハマキムシ類(越冬世代)	中通り	—	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花らい被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	複合交信かく乱剤を使用する園地では越冬世代成虫発生初期までに設置する。
ナシ	黒星病	中通り 浜通り	—	平年並 やや少ない	4月中旬の芽基部病斑の発生ほ場割合は、中通りで平年並(±)、浜通りでやや少なかった(—)。	りん片が付着したままの花そうは、芽基部病斑の可能性が高いので、見つけしだい除去し、適切に処分する。 子のう胞子の初飛散は4月9日に確認された(果樹研究所)。薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	ハダニ類(リンゴハダニ、クワオオハダニ)	中通り 浜通り	—	平年並 やや少ない	令和5年12月実施の越冬量調査において、越冬卵が確認されたほ場の割合は、中通りで平年並(±)、浜通りでやや少なかった(—)。	ハダニ類の発生状況を観察し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達したら殺ダニ剤を散布する。

ナシ	ハマキムシ類（越冬世代）	全域	－	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花そう被害の発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	前年に発生が多かった園や、現在、新梢に食害が見られる園では落花1週間後の防除を実施する。 複合交信かく乱剤を使用する園では越冬世代成虫発生初期までに設置する。
----	--------------	----	---	-----	---	--

注) 予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

リンゴ	<p>■腐らん病</p> <p>ほ場での発生状況をよく観察し、枝や主幹などの発病部位は、徹底して除去しましょう。枝腐らんは健全部5cm以上含めてせん除し、胴腐らんは周囲の健全部5cmまで広く削り取ってください。切り口には必ず殺菌塗布剤を塗布し、感染を防止し、除去した発病部位は伝染源となるおそれがあるので、園外に持ち出し適切に処分しましょう。</p> <p>「ふじ」は摘果が遅れると果柄が脱落しにくくなり、本病に感染しやすくなるので早期に摘果を実施しましょう。</p> <p>■黒星病</p> <p>子のう胞子の飛散が確認されています（会津地域研究所）。本病の最重点防除時期は、展葉期から落花20日後頃であるので、この期間の薬剤散布間隔があきすぎないように注意し、散布ムラのないよう十分な量を散布しましょう。</p> <p>青森県をはじめ他のリンゴ主産県で本病の重要防除剤であるDMI剤の耐性菌の存在が確認されています。本剤耐性菌がまん延すると防除薬剤の効果が低減するおそれがあるので、DMI剤の使用回数に留意しましょう。また、他県からリンゴ苗木・穂木等を導入する際は十分注意しましょう（「注意喚起 他県でのリンゴ黒星病におけるDMI剤耐性菌の発生について」（https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/apple-dmi.html））。</p> <p>■褐斑病</p> <p>子のう胞子の飛散が確認されています（果樹研究所）。昨年10月の新梢葉における本病の発生ほ場割合は、平年よりやや高い状況であり、越冬量がやや多いと推測されます。また、昨年は、6月中旬に発生が確認された園が複数ありました。本病原菌は主に罹病落葉で越冬し、翌年5～6月頃に子のう胞子を飛散し、葉に一次感染します。本病は、初発が早いと多発する傾向にありますので、一次感染期からの防除の徹底が重要となります。</p> <p>例年発生がみられるほ場では、「農作物病害虫防除指針」や各地域のリンゴ防除暦を参照し、落花直後、落花2週間後、落花30日後に本病に効果の高い薬剤を散布して初期の感染を抑えましょう。なお、本年はリンゴの生育が前進していますので、薬剤防除も散布間隔が空かないように前進させ、降雨前防除も徹底しましょう。</p>
ブドウ	<p>■晩腐病、黒とう病</p> <p>前年の房の取り残し部分、巻きひげ、結果母枝の枯死部などを丁寧に除去し、越冬病原菌密度の低下を図ってください。なお、巻きひげ除去には専用器具を使用すると効率的に作業ができます（令和5年度「参考となる成果」（https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/624637.pdf））。</p>
モモ	<p>■シロカイガラムシ類（ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ）</p> <p>ウメシロカイガラムシの第1世代幼虫のふ化ピークは平年で5月下旬頃であり、クワシロカイガラムシは、ウメシロカイガラムシより5～10日程度遅く、防除適期が異なります。令和5年度「参考となる成果」により、両種を同時防除できる殺虫剤が明らかとなりました（http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/624632.pdf）。</p> <p>なお、果樹研究所の調査によると、昨年は両種の第1世代幼虫のふ化ピークが平年よりも早く、ウメシロカイガラムシが5月上～中旬頃、クワシロカイガラムシが5月中～下旬頃でした。本年は冬期が温暖で経過したため、平年よりふ化ピークが早まる可能性があり、今後の気象経過により防除適期が変動しますので、注意しましょう。</p>

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多発すると防除が困難になるので、発生初期から薬剤防除を実施する。
	灰色かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	過湿にならないよう換気を行う。 発病果や罹病した果梗、老化葉などはハウス内に放置しない。
	アブラムシ類	全 域	やや早い	やや多い	発生時期は、5月調査の平年値と同程度であり、発生の早まりが懸念される。 発生ほ場割合は、平年並であった(±)が、天候予報(仙台湾気象台4月18日発表)によると、向こう1か月の気温はかなり高くなると予想されている(+)	低密度時から薬剤防除を実施する。薬剤抵抗性の発達を防止するため、RACコードの異なる薬剤を組み合わせ、ローテーション散布を行う。
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年並であった(±)が、天候予報(仙台湾気象台4月18日発表)によると、向こう1か月の気温はかなり高くなると予想されている(+)	低密度時から防除を徹底する。 薬剤感受性が低下しやすいので、薬剤の効果を確認し、気門封鎖剤も含めて系統の異なる薬剤をローテーション散布する。 天敵製剤(ミヤコカブリダニ、チリカブリダニ)を放飼している場合は、ハダニ類の発生状況に応じて、天敵に影響の小さい薬剤を選択する。
	コナジラミ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや少なかった(-)。	排泄物に発生するすす病は果面の汚れによる品質低下を招くので、発生密度に注意し、薬剤防除を実施する。 コナジラミ類については侵入を防ぐとともに野外の分散を防止すること。
アザミウマ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(-)が、天候予報(仙台湾気象台4月18日発表)によると、向こう1か月の気温はかなり高くなると予想されている(+)	発生が多くなると果実被害が生じるので、低密度時から防除を実施する。	

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

イ チ ゴ	<p>■萎凋病、萎黄病、炭疽病</p> <p>これらの病害を防ぐためには、まず無病地からの採苗、育苗を徹底することが基本的対策となるため、ほ場で発病が確認されている場合は次年度に向けて以下の対策を実施してください。①育苗用土壌やポット等の資材を一斉に更新する。②炭疽病は水媒伝染するため、親株を育苗する際は高設育苗を行うとともに、頭上からの灌水を避ける。③発病株、または発病が疑われる株は、見つけしだいその周囲の株と土を含めて丁寧に抜き取り、適切に処分する。④これらの病気が発生したほ場で連作せざるを得ない場合は、土壌消毒を実施する。</p> <p>なお、イチゴの土壌病害の簡易検定方法について、病害虫防除所ホームページの病害虫ライブラリー(野菜花き類の病害虫、イチゴの病害)に掲載しているので参考にしてください。</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433111.pdf</p>
-------	---

より詳しい発生状況や防除対策は、

福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。

お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。